

「水と都市 ～ モノローグ」

平成 15 年 10 月 6 日(月)

講演者： 野田順康、国連ハビタット福岡事務所長

講演場所： 世界ハビタットデー2003 記念シンポジウム (於 アクロス福岡国際会議場)

皆さん、こんにちは。ご紹介をいただきました国連ハビタット福岡事務所長をしておりま
す野田です。

本日はご多忙の中を、私ども「世界ハビタット・デーの記念シンポジウム」にご参加をい
ただきまして、大変ありがとうございます。

ただいま麻生知事のほうから、この国連ハビタットの福岡事務所ができました経緯等につ
いてお話をいただきました。ようやく6年を経まして、私どももこの福岡の地に根づいて
きたかなということ、少し感じておるところであります。自治体の方々をはじめ一般市
民の方々、またNGOの皆様からさまざまな形でご支援をいただいております、活動と
しましても、今、アジア太平洋の広い範囲で順調に進んでいるところです。

今日はモノローグということですので、一人でぶつぶつしゃべることかもし
れませんが、国連ハビタットのご紹介を再度させていただきながら、その後、今回
の「水と都市」というテーマにつきまして、少しお話をさせていただきたいと思いま
す。

国連ハビタットというのは、すべての人々に適切な住宅を提供していくこと、住宅と住宅
周りの水、また排水施設、トイレというようなものを整備していくということが最大の仕
事です。その場合に「住民参加型のまちづくり」、これは日本でもいろいろな形で住
民参加ということが言われておりますけれども、ハビタットがやっております事業はさら
にそれが深まったといえますが、住民の参加していく形態が日本よりもさらに積極的、例
えば住民が自ら住宅を建てる、そういう考え方を持って事業を進めているところであり
ます。

ここに国際連合の全体図を示しております。今もニューヨークで国連総会を開いていると
ころです。また、アフガン攻撃、イラク攻撃という時には安全保障理事会というところで、

いろいろな議論がされてきたわけです。その下に、皆様がよく耳にされます、子どもに関係するユニセフですとか、教育に関係するユネスコといったところがあります。そういった専門機関の一つとしてUN-HABITAT、「国連人間居住計画」という組織があるわけです。本部はケニアのナイロビ、それから実際の事業を行っております3つの地域事務所、これが福岡とリオデジャネイロとナイロビ、この3カ所にあります。またそのほか7つの広報連絡事務所を配置しているところです。

先ほど知事からもご説明いただきましたように、福岡事務所、正確にはアジア太平洋地域事務所ということでありまして、1997年に福岡に開設をしていただきました。現在このアクロスのビルの8階に私どものオフィスがありまして、18名、インターンを含めまして20名ぐらいの職員が常駐しております。活動地域としては28カ国、職員としては福岡事務所のもとに1,000人以上がおり、28カ国の中で16カ国に事業事務所があり、71の事業を進めているところです。



これが私どもが担当しているアジア太平洋地域でありますけれども、赤いポイントのところで事業をしておりまして、西はイランまで、東は日付変更線、例えばフィジーといったようなところでも事業を展開しているところです。



さて、この写真は何かということですが、これは私どもが事業の対象として取り組んでいる発展途上国のスラムの写真です。現在の世界の人口は62億人と言われておりますが、これが2030年には83億人、これから21億人増えていくわけでありまして、この増える人口のほとんどすべてが、こういった発展途上国のスラムに集中するということになります。21世紀のスラム問題というのはますます大きな問題になってまいります。



こういったスラムには上水道、いわゆる水道ですが、水道の蛇口がありませんので、一般的にはこういう川沿いにずっと広がっていくというのが発展途上国のスラムであります。



私はいつもこの写真を小学校、中学校、高校で講演をする時に、「これは何でしょうか」というふうに聞くのですけれども、子どもたちは大体これは池だとか、どぶ川だとか、そういうことを言うわけであります。実は、これが発展途上国で使われている飲料水であります。したがって、当然水に関連する病気が蔓延をして、主に下痢でありますけれども、その結果として発展途上国の乳児死亡率、5歳以下の子どもの死亡率が非常に高いというのが現在の発展途上国のスラムの問題であります。

こういう問題に取り組むにあたりまして、それではハビタットはどういう取り組み方をしているのかということでもあります。パートナーシップ、これは最近いろいろところで耳にされるかと思いますが、要するにみんなで協力し合ってやっというものがパートナーシップであります。スラムに住んでいる住民自身、さらには自治体、NGO、また関連する民間企業が一緒になってスラムの問題を解決していこうという体制をとって私どもは事業を進めております。



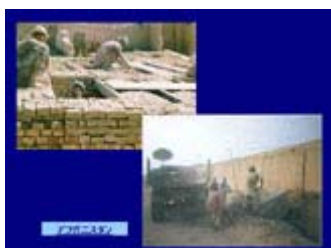
例えばミャンマーで、これは実際に地域のコミュニティーの人たちが集まって「まちづくり」について議論をしているところでもあります。



これはアフガニスタンです。アフガニスタンの場合には宗教上の問題があって、男女別々に集まって相談をするわけですが、下の写真は、女性の「コミュニティー・フォーラム」と呼ばれる会議です。実は真ん中にあるのが私どもの職員佐藤摩利子でありますけれども、ほとんどアフガン人化しております。私もアフガンに行きますと、こういう形で住民集会に参加をしながらお話をしております。こういう話し合いが終わると、実際に現場に住民が出て行って、設計図を見ながら自分たちでこれからどういう形で事業を進めるかということを相談していくわけです。



例えば、これは灌漑施設をつくっているところでもありますけれども、まちの人が直接建設事業に乗り出していき、協力していく。そして自分たちで灌漑施設をつくっていくということをハビタットは強力に進めているところでもあります。



これはアフガンで住宅をつくっているところ、また道路を直しているところですが、アフガニスタンの場合も住宅というのは自分たちでつくる。ハビタットはただ技術的な協力と柱、窓枠といった資材を提供するだけで、あとは家の持主、またその親戚、またその隣人が自分たちで家を建てるということをやっているわけです。

その結果として、この家1軒、大体50平米強ぐらいの広さの家ですけれども、1軒5万円以下で住宅を建てていくというのがハビタットの事業であります。昨年1年間で約1万戸の住宅をアフガニスタンではつくっておりますが、そういう噂をお聞きになって、日本の住宅会社の方がたくさん「仕事はないでしょうか」とおみえになります。日本の場合、例えば神戸の地震の時の簡易住宅、1軒400万円です。したがって、アフガンの住宅建設も1軒400万円ぐらいというイメージで来られるわけですけれども、私どもは1軒5万円ということで、日本の企業さんには申し訳ないのですが、なかなか利益が上がらないということであります。住民参加型を通じて非常に安い値段でたくさんの住宅をつくる、そういうことが私どもの事業方針となっているのです。

今日のテーマの「水」につきましても、こういう形で井戸を掘り、ポンプをつくっていくということです。私どものほうに日本のいろいろな企業さんが来られます。「井戸を掘っていく機械を購入されませんか。1台1,500万円です」ということですが、私どもはこういう井戸を1本大体10万円で掘っておりますので、なかなか价格的には日本の企業さんの参加といえますか、いわゆる利潤ベース、企業ベース乗ってこないというのが現状であります。



こういう住民参加、住民が自ら町を改善していくと、先ほどお見せしたバラック建てのスラム街というものが、少しずつこの写真で出ているような美しい街並みに変わっていく。私どもはこういうことを発展途上国でやっているわけです。

アフガニスタン、特に今は非常に大きな事業で、日本円にしまして、大体50億円を超えるぐらいの事業を私どもアフガニスタンでやっておりますけれども、基本的にはコミュニティーをきちんと整備をしていくということです。そしてコミュニティーによる住宅の再建、

また水の供給、ごみ処理、といったことをやっております。

イラクの場合は私どもの事務所の管轄ではありませんけれども、私が駐日代表ということで、イラクの事業にも参加といいますか、協力しております。7月19日から1週間ほど、私もバグダッドのほうに行っておりました。非常に治安が悪化して、危ない状況ではありますが、イラクでのハビタットの事業は非常に大きなものであります。1997年からの5年間で大体720億円ぐらいの事業をしております。イラクだけで600名ぐらいのハビタットの職員が展開しており、すでに住宅だけでも2万戸以上、それから上下水道の整備ということもイラクでやっているところであります。

本日は「世界ハビタット・デー」ということで、世界中で居住問題を考えていただく、そういう日であります。1985年に国連総会で10月の第1月曜日を「世界ハビタット・デー」と指定しようということになりまして、今年で18回目ということになります。2001年にはこの福岡で世界大会を開かせていただきました。この時のテーマは「スラムのないまちづくり」ということで、私どもの事務局長もまいりまして、「世界ハビタット・デー」を開催させていただいた経緯があります。

今年につきましては、2003年、今年自体が「国際淡水年」ということでありまして、3月には関西で「第3回世界水フォーラム」が開かれたわけです。その中に非常に水と関連するテーマが18以上あったと思いますけれども、その中の1つとして国連ハビタットは「水と都市」ということを担当させていただきました。そういう経緯もありまして、今回の「世界ハビタット・デー」のテーマは「水と都市」ということで、このことについて世界中で考える機会としたいと思います。今年の世界大会はブラジルのリオで本日開催をしております。

これは母なる大地、また命の水、地球の写真であります。人類の歴史を見ましても、四大文明をはじめとして水と切っても切れぬ仲で、水なしには世界の文明というものは出てこなかったということでもあります。それぐらい人間と水との関係は深いわけでありましてけれども、先進国においては、この水というのはそういう文明の発展、また生産基盤の発展ということのほかに、今や「水と遊ぶ」ですとか、「エンターテインメント」「水に癒される」というようなことにも使われる、そういう形の水との関わり方も出てきているところであります。

特に「水と都市」ということに関わりまして、都市にとってはいわゆる水際の都市開発、ウォーターフロントというようなことも先進国においては非常に大きなテーマであります。シドニーはすばらしい水際都市でありますし、お近くの上海も水際にすばらしい大都市が

今、建設をされつつあるということでもあります。それから皆さんがお住まいになっているこの福岡市もまさにウォーターフロントの素晴らしい街が今、成長をしているところでもあります。

そういった水に関わる都市づくりがこの福岡でも行われているわけでありますけれども、街の中にもキャナルシティですとか、リバーウォークといったような水をテーマにしたまちづくりがなされています。キャナルシティのテーマというのは「水と遊ぶ」であり、また「水に癒す」、そういったこともテーマにしてまちづくりがされているということでもあります。先進国にとってはまさにそういう癒しの部分にも水が使われるということでもあります。ただ、先ほど知事もおっしゃってありましたように、福岡というのは例えば水の質の問題ということもあると同時に、いわゆる多すぎる水、これは洪水という形です。集中豪雨等によって今年も一部洪水が発生いたしました。それからまた濁水、少なすぎる水ということもありまして、数年前には濁水に直面したというのがこの福岡の街であります。

ここまでは先進国の話ですけれども、発展途上国におきましては、今、申し上げた多すぎる水、いわゆる水による洪水、そういった災害の問題、それから少なすぎる水、洪水はあるけれども絶対的に飲み水が足りない。こういった問題が発展途上国の非常に大きな問題でありまして、さらに先ほどお見せしたように、本当にどぶ川の水のようなものが飲料水として使われている。その結果として子どもたちが下痢等の病気で死んでいくということが発展途上国の水問題だというふうに思うわけです。

ここに簡単な数字を示しておりますけれども、現在世界の5人に1人が安全な水を飲めない、また毎日6,000人の子どもたちが下痢などの水関連の病気で死んでいるというのが現在の状況であります。特にそういう問題というのは発展途上国のスラム、そういうところで集中的に発生しているというのが現在の発展途上国の水問題であります。



特に子どもたちは水を川から家まで運ぶということを毎日強いられる。

それが子どもたちの仕事になっているというようなところもありますし、それから十分な教育が行き届かないために、いわゆる泥水を飲む。結果として下痢等が発生して亡くなっ

ていくということが問題になっているわけであります。



こういう中でハビタット、また水に関連する国連機関、またいろいろな国際協力の組織としては左側の図にありますような井戸を掘り、上水を整備する。また教育を徹底してちゃんと煮沸をした、熱した水をポットに入れて、それを子どもたちに飲ませる、そういった教育をやっていくということがとても重要なわけであります。



ここにありますようないわゆるポンプ場ですとか、水の供給施設というものをできるだけ安価に、安い値段で発展途上国に整備をしていくということが、私どもに課せられた課題であるというふうに思っているところであります。

福岡のほうに私どもはもう6年いて、いろいろな形でご協力をいただけるようになってまいりました。今年の「世界ハビタット・デー」、「水と都市」については国連ハビタットとキャナルシティで共同事業をやることになっております。これはキャナルシティの管理会社さんの協力を得て進めるわけですが、現在キャナルシティの中で国連ハビタットがやっております子どもたちの水をテーマにした絵画コンクールをやっております。これを題材にいたしまして、私どもはカレンダーを制作し、それを販売させていただきたいと思っております。一方、キャナルシティさんのほうはキャナルサーカスというのを10月11日から開かれまして、そこで国連ハビタットの支援イベントということで、募金箱の設置とか、オリジナルグッズの販売をしていただくことになっております。

国連ハビタットとしまして、私どものホームページ、また本日の世界会議でこういう民間

の方々が国連の水問題を支援していただくということについてご報告をする予定であります。チャンネルシティさんのほうには私どもの記念絵画コンクールの場所を提供していただきます。また19日には表彰式をしていただくという形で共同事業をやっていきたい。カレンダーの販売、また募金ということを通じて集まったお金につきましては、「アフガニスタンいのちの水事業」ということをやらせていただきたいというふうに思っております。去年、カレンダーだけで大体200万円程度のお金が集まっておりますけれども、アフガニスタンでは井戸1本10万円で掘れますので、200万円集まれば20本の井戸が掘れる、300万円集まれば30本ということで、これを今年の「世界ハビタット・デー」の1つの成果としてアフガニスタンで進めてまいりたいというふうに思っております。

本日はこれからシンポジウムを通じて、より深く発展途上国の水問題、またそういうことについての国際協力、福岡として何ができるか、そういったことについて議論をしていただきたいというふうに思っております。

皆様、最後までご清聴いただきますようによろしくお願いいたします。どうもありがとうございました。